

〈資料紹介〉日本におけるイスラームの状況

岩井, 純 / IWAI, Jun

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

1989-03-31

資料紹介

日本におけるイスラームの状況

岩井 純

I はじめに

20世紀にはいるまで、イスラーム世界と日本との間には直接的関係はなかった。20世紀初頭のデータによると、中国には4万2000のモスクがあり、4800万人のムスリムがいたといわれている。ところが、日本と中国との交渉は商業関係にとどまり、イスラームが日本に浸透することはなかった。ただし、エジプト人ムスリム、アフマド・アル・ジャルジャーウィーの旅行記には、多くの日本人がイスラームを受け入れたと書かれている。かれは20世紀初頭日本で開催された世界宗教者会議に参加し、その後2年間日本に滞在し、布教活動を行った人物である。日本はかつて中国大陸の一部、マレーシア、インドネシア等を占領し、ムスリム達と接触した。今世紀前半期の日本人ムスリムの多くは、これらの地でイスラームを知り、入信した人々である¹⁾。

戦前の日本でイスラームへの関心が高まったのは、日本が大東亜共栄圏を唱え、中国および南方のムスリム勢力を無視しえなくなったからであり、国策に基づいたものであるといえよう²⁾。

イスラーム世界とは、イスラーム法(シャリーア)の施行される地域を意味する。イスラーム法は宗教だけでなく政治・経済・社会を含むムスリムのすべての行為を規制する法である。征服、神秘主義教団の伝道、イスラーム商人の影響等が密接に絡み合いながら、イスラーム世界は拡大してきた³⁾。しかし、イスラームにおいては、死または暴力の脅威による改宗はキリスト教におけるよりまれで、それはクルアーンでは明確に禁じられている⁴⁾。

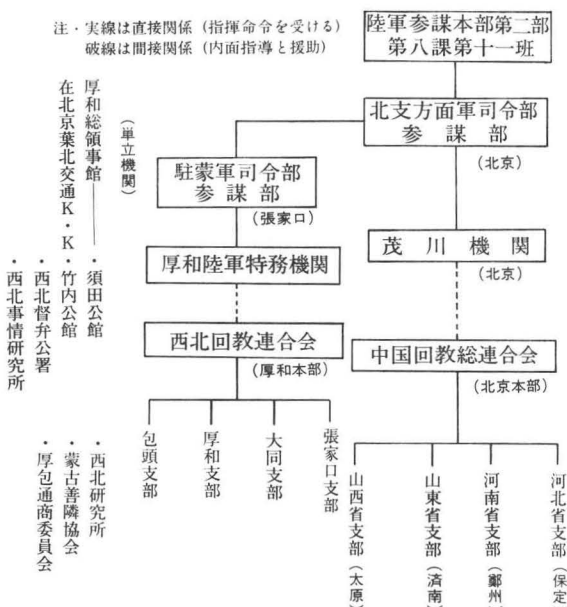
イスラームの東漸は北方ルート、いわゆるシルクロードに沿う大陸経路によるものと、南方ルートすなわち海洋づたいにアラビア海、紅海、インド洋、マラッカ海峡、南シナ海などを経てマラバル海岸(インド)、スマトラ、マレー半島、ジャワ、フィリピン、広東へ到達するものがある⁵⁾。しかし、版図を拡大していったイスラームは、ついに東アジアにはその影響を及ぼすことができなかった。日本は両ルートより離れた位置にあり、そ

れがイスラームの影響を受けることがなかった一因とも考えられる。

日本のムスリム人口を宗教年鑑(1986年)によって5万5950名(実質的な数はこれを下まわる)としても、総人口に占める比率は0.0005%に過ぎない。日本はイスラームの最稀薄地域のひとつで、まさにイスラームの真空地帯⁶⁾といえよう。

日本人が国民的レベルで、イスラーム世界に関心をもちようになったのは、1973年秋の第1次石油ショックからである⁷⁾。アラブ産油国の石油戦略が発動されると、トイレットペーパーにはじまった買いただが、洗剤・砂糖など生活必需品全般にひろがり、ガソリンなどの石油製品も急激に値上がりし、狂乱物価の様相⁸⁾を呈してきた。日本人はイスラーム世界の動向に注目せざるを得な

第1図 イスラーム関係組織系統図
(戦時中の中国方面における)



資料：小村不二男『日本イスラーム史』付図
(但し一部訂正)

い状況になったのである。それまでは、イスラーム圏に属する国々が発展途上国の範疇にはいるが故に、政治的・経済的・文化的の大国至上主義の観点からすれば、日本人のイスラーム軽視をやむを得ないとする状況であったともいえる⁹⁾。

とりあえず本稿では、日本におけるイスラームの現状が報告されていないことを考慮し、明治以降の日本イスラーム史に触れ、現在の日本におけるイスラーム組織の実状を報告する。その中で特に、日本のイスラームは戦中・戦後とも宗教としてよりは、別の目的で諸勢力（ムスリムを自称する人も含めて）に利用されてきた歴史をもっており、「利用される存在」としての側面にも注目しておきたい。

イスラームそのものの精神や儀礼等の研究は多くなされているものの日本のイスラームの状況については、わずかに森本武夫「ISLAM IN JAPAN ITS PAST, PRESENT AND FUTURE」、小村不二男「日本イスラーム史」等日本人ムスリムによる研究がなされているにすぎない。

本稿をまとめるにあたっては森本・小村の研究をふまえ、内外のムスリムからの聞き取り調査を中心とした。

Ⅱ 日本におけるイスラーム史の概要

1. 初期の日本人ムスリム

日本イスラーム史上最初の日本人ムスリムは山田寅次郎（1866・慶応2年生）と有賀文八郎（1868・慶応4年生）である¹⁾。

山田は実業家（貿易事業等）であり、また茶道家元でもあって、山田宗偏流八世宗有と称した（千利休の孫である宗旦の門に学んだ山田宗偏は「宗偏流」と称する流派の門祖となった。寅次郎は門祖宗偏からかぞえて8代目にあたる）。トルコ軍艦エルトグロール号遭難弔慰の義捐金を持参してトルコを訪れたことが縁となり、山田は通算18年間トルコに在留した。1902（明治35）年頃、トルコ皇帝アブドル・ハミッド二世の勅めで山田はイスラームに帰依したのである²⁾。

有賀も実業家として貿易業務に従事していたが、1892（明治25）年頃ボンベイでインド人ムスリムで実業家でもあるヘーダラーの影響によりイスラームに帰依する³⁾⁴⁾。草創期において有賀が日本人向けに説いた「日本のイスラーム」を以下に要約すると、「天皇皇后並びに皇族を奉敬する。国を愛し、その為には死を賭して奮闘する。酒は飲まざるを良しとする。但し、健康を保つに必要な者はこの限りにあらず。豚肉は食うべからず。但し、他に適当な副食物を得ざる時は、この限りにあ

ず。また神道との関係では天御中主大神はムスリムの信ずる唯一真神と同一の神であるから、この天御中主大神を信仰する人々は自然ムスリムと同一信徒なりと思う。一日も早くわが国にイスラーム団体ができるならば、それが国権拡張の原因ともなり、7億の人類が英米の圧迫より免れることができると信ずる⁵⁾」というものであった。現在の日本人ムスリムの常識から考えれば、疑問な点が（少なくとも建前上は）多々あることと思う。

1909（明治42）年には山岡光太郎（1880・明治13年生）がイスラームに帰後し⁶⁾、同年日本人ムスリムとして最初のメッカ・メジナ巡礼を果たした⁷⁾。

日本イスラーム界は昭和に入ると急速に伸張する。その要因はいくつかあるとしても、この時期における国策の一環としての大陸政策遂行という時代背景が大きく作用していることは否定できない。この時期は山田・有賀を第1グループとするならば、その次の明治10年代生まれの第2グループ山岡光太郎・田中逸平・内藤智秀・佐久間貞次郎・大村謙太郎等と、明治20年代生れの第3グループ松林亮・三田了一・須田正継等が活発なイスラミック実践活動を行った。第2グループが文筆活動が主であったのに対し、第3グループは対象的に中国で諸般の実際活動（各種族間の動向・言語風俗・思想などの情報収集や親日工作、東トルキスタン独立イスラーム政府樹立運動への協力・支援⁸⁾等）を推進した点に特色⁹⁾がある。

2. 第二次大戦前のイスラーム関連組織

1930年代後半からイスラーム文化協会・大日本回教協会・回教圏研究所・東亜経済調査局・東京イスラーム教団等が設立された。研究者によるイスラームに関する調査研究や啓蒙活動が行われたのみではなく、日本人ムスリム・実務家・軍人等も活動に参加した¹⁰⁾。以下に概略を述べる。

a イスラーム文化協会

1937（昭和12）年設立、具体的活動として定期刊行物（年約4回・日本語）および不定期刊行物（年約3回・中国語・トルコ語・アラビア語・イラン語・マレー語およびウルドゥ語）の発行、文献の収集、研究会・講習会・講演会・展覧会等の随時開催¹¹⁾。

b 大日本回教協会

1938（昭和13）年9月19日開設、1945（昭和20）年10月15日解散。初代会長は元内閣総理大臣・陸軍大将林銑十郎である。機関誌「回教世界」を刊行した。蘆溝橋事件を契機として「東亜新秩序」の建設を意図する者達は、イスラーム諸民族を日本に対する協力の可能性ある存在として認識した。井上清純・林銑十郎・頭山満・小

資料紹介

笠原長生・小幡西吉・田鍋安之助・瀬下清の主唱により、イスラーム諸民族対策機関（実情調査・親善提携）として挙国総動員の団体を組織する使命をもって設立されたのが大日本回教協会である¹²⁾。

c 回教圏研究所

1933（昭和8）年10月大久保幸次が設立した「イスラム学会」を母胎とし、1938年3月その組織を拡大して、「回教圏攷究所」が誕生した。1940年4月内部機構の改革を図るとともに「回教圏研究所」と改称。出版物に月刊「回教圏」がある¹³⁾。

d 東亜経済調査局

1929（昭和4）年、満鉄本社から分離独立（満鉄調査部から誕生）した財団法人組織で、理事長は大川周明であった。豊富な運営資金を背景に膨大な資料の収集、研究活動範囲の多様性（例えば大川はアジアにおけるヨーロッパの植民政策についての研究、特にインドにおけるイギリスの分割統治政策を主とし、三田は満州における農業経済の動向調査が主であった）に特色がある。機関誌「月刊新亜細亜」（坂本徳松主任）を発行した¹⁴⁾。

e 東京イスラム教団

1938年6月24日、東京モスク（代々木大山町）隣接の東京回教学校講堂において「東京イスラム教団」結成協議会が開催された。ちなみに、東京モスクの落成開堂式が行われたのは1938年5月12日のことである。教団の役員には名誉顧問頭山満・小笠原長生（子爵）・瀬下清・川島義之（陸軍大将）・山本英輔（海軍大将）・南郷次郎（海軍少将）・鳥居龍蔵、顧問葛生能久・若林半・加藤久・足羽清美、相談役鈴木剛が名を連ねていた¹⁵⁾。

3. 第二次大戦中のムスリムの活動

この時期は対外親日工作、つまりムスリムとなった人達を軍部が軍事的見地から調査員・諜報機関員として利用した例が顕著である。

a 中国方面におけるイスラーム工作

第1図にみられる機関がイスラームを信奉する各民族の風俗・習慣・生活様式等の基礎資料の収集分析作業をふまえた上で独自の特殊な活動や親日工作に携わった。

茂川機関（機関長茂川秀和大佐）は日中戦争以来華北全体のイスラーム工作を掌握・指揮していた機関で、「中国回教総連合会」（初代首席顧問高垣信造、二代目三田了一）を背後から把握・監督していた¹⁶⁾。中国回教総連合会は1938年初頭に発足した。初代首席顧問の高垣信造はアフガニスタン政府の招請によりカブールで宮廷柔道を教授し、国王アマヌラ汗の信任を受けた経歴を軍部から評価された人物である¹⁷⁾。

西北回教連合会（主任顧問小村不二男）は1938年12月

15日創立。「綏遠回民総公会」（代表者艾馨）と「察哈爾回教文化協会」（代表者李郁周）の2つの他に大同市と包頭市のムスリムを包括したものである。この西北回教連合会は将来「東トルキスタン汗国」なる独立イスラーム政権の樹立を目指すものであった¹⁸⁾。

西北事情研究所は1942（昭和17）年厚和に創設。シルクロードを通じて西域トルキスタン方面の民族動向と物情地誌等の調査研究を集約して、小村不二男が立案した特殊施設である¹⁹⁾。

須田公館は内蒙綏遠に開設された。須田正継はロシア・イスラーム研究のエキスパートであるのみならず、昭和初期のハルビン陸軍特務機関における対ソ諜報のベテランとして評価されていた人物である²⁰⁾。

b 南方方面におけるイスラーム工作²¹⁾

インドネシアにおける親日工作機関としては「ジャワ回教別班」（責任者鈴木剛）と「セレベス回教協会」（責任者小林哲夫）とがある。ジャワ回教別班の士官・下士官の中には中野学校出身者が少なくなかった。

セレベス回教協会は海軍軍令部直属の情報機関通称「花機関」（花田行武少将を長とする）と緊密な横の連携があったという。

Ⅲ 日本における現在のイスラーム組織

1. 日本ムスリム協会

松林亮・今泉義雄・渡辺正治・烏山和人・脇坂利徳・古沢賢太郎等の日本人ムスリムが1952年趣意書を発行し、日本ムスリム協会を設立した。これはムスリムのための宗教活動を目的とする日本で最初の組織である。創立当時の会員は65名であり、初代会長には今泉義雄が選ばれた。日本ムスリム協会は東京都中央区銀座の丹青社（渡辺正治経営）に設置した仮事務所から活動を開始した¹⁾。1957年7月には会員数は112名となり、1960年今泉の死後三田了一が二代目会長となった。その後、三代目会長齊藤積平が最初に行ったことは日本在住外国人ムスリムのための墓地獲得であった。日本の地方自治体のほとんどは火葬を強制しているが、それは外国人ムスリムの受け入れるところではない。そこで、土葬可能な土地（広さ7585㎡）を山梨県塩山市の丘陵地帯に取得した²⁾。これは日本のイスラーム史に特筆すべきことで、サウジアラビア大使館その他の支持を拡大させることになる。

1968（昭和43）年6月12日日本ムスリム協会は宗教法人として公認された。それまで、ムスリム協会の会員は日本人ムスリムに限定されていたが、宗教法人に認可されてからは日本在住外国人ムスリムも会員たり得よう

になった³⁾。ところが、協会は日本人ムスリムと日本在住外国人ムスリムとの統一組織から、現在事実上日本人ムスリムのみの組織のように変化してきた⁴⁾。

協会はイスラームの教義を広め、儀式行事を行い、またムスリムを教化育成し、ムスリムの連帯と福祉の向上に貢献するための業務を行うことを目的としている。これらの目的を達成するために、イスラーム固有の行事（断食あけの祭日・犠牲祭等）の主催または協力、入信式・結婚式・葬儀等の儀式の際にイマーム（導師）を補佐することや伝道活動としてタブリーグと称するイスラーム独特の訪問布教を行い、講演会・講習会・研究会などによる一般伝導集会の開催をする。協会はクルアーンの刊行配付と各種出版物による広報宣教活動やイスラーム諸国との国際親善の推進（留学生の交換・相互訪問・旅行者の接待等を通じて）をも重視している⁵⁾。

会員数は1986年現在160名⁶⁾であるが、礼拝等の日常活動を行っている者は、この半数程度と考えるべきであろう。現会長は有見次郎であり、日本人9名から構成される理事会が運営している。

協会の運営資金としては会員の納入する会費と寄付金（協力金）・援助金があてられる。現状は会費収入よりも、アラブ諸国の留学から帰国した人達の勤める企業からの協力金とラービタ（世界イスラーム連盟）からの援助金とが多いという状況である。

日本ムスリム協会は山梨県塩山市にあるイスラーム霊園管理の名目で宗教法人として認可された。そのためムスリム協会は山梨県登録の宗教法人となっている。代々木にある事実上の本部は東京「事務所」にすぎない。

2. イスラミックセンター・ジャパン⁷⁾

信者数790名、代表理事木場公男⁸⁾。宗教本人の認可は1980年であるが、組織として設立されたのは1974年である。設立当時の事務所は東北沢の借家にあり、現在の建物が完成したのは1982年のことであった。

イスラミックセンターは総会で選出された11名の理事会によって運営されている。1987年現在の理事の国籍はパキスタン3名、サウジアラビア1名、スーダン2名、インド1名、パングラデシュ1名、中国1名、日本2名となっている。センターの事務職員は3名、それに通常は2～3名、多忙時は20名ほどのボランティアが活動するという。

センターの活動内容は講演会・ムスリムに関わる結婚のアドバイス・アラビア語講座・イスラームに関する書籍や雑誌の出版等である。センターではムスリムである「証明書」の発行も行う。証明書を所有するムスリムと所有しないムスリムとの間で身分的に取扱いの差はな

い。あえていえばヨーロッパや日本のような非イスラーム国の人間が特定のイスラーム国に行く場合と、外国人ムスリムとの結婚時に証明書が必要になることがある。証明書は日本ムスリム協会や地方の小センターでも発行しており、アラビア語ではなく発行する国の言語で書かれ、日本では日本語が使用されている。

1973年前後、サウジアラビアは流入するオイルダラーで世界各地にモスクやイスラミックセンター建設のプロジェクトを実施した。その時代に、日本ムスリム協会から分かれてイスラミックセンターに移った人達がいて、そのためムスリム協会の中にはイスラミックセンターに対して批判的な人もいる。センターには外国人（アラブ人・パキスタン人・インドネシア人・トルコ人等）が多く結集しているほか、留学から帰国した日本人も多い。

センターは雑誌「アッサラーム」その他の印刷物の発行によるイスラームの普及活動をしているのであるが、日本文化の研究・日本の実状に適合する形の普及を考える点に弱点がみられるとの批判もあり、外国との交流機関としての性格が強いと考えられる。

運営資金は個人の献金（街頭での募金活動は行わず、電話や手紙で募金の要請をする）に加え、ラービタからの援助もあると思われる。

3. 日本イスラム教団

設立登記1975年9月18日、信者数5万5,000名⁹⁾。総裁二木秀雄。日本ムスリム協会（160名）、イスラミックセンター・ジャパン（790名）に比較して著しく信者数が多い。この教団については新聞・週刊誌等で報じられたことがあるので、それらを引用することにより、教団の性格・特徴を述べることにする。

総裁の二木秀雄は「金沢医大の出身で、福井県庁学務課に勤めたあと、同大助教授。その後、陸軍から引っ張られてハルビンで、細菌戦の研究に従事、当時は、チフス菌の研究では名の通った学者だったという。それが戦後、東京で開業医をしながら、『政界ジープ』という月刊誌を主宰、これを使って企業を脅かしたというので昭和31年4月に逮捕された¹⁰⁾」ことがある。二木秀雄他3名が東京モスクで入信式を行ったのは1974年12月29日のことである。二木の診療所の関係で1975年3月21日81名、同年4月4日225名、同年5月12日739名がイスラームに入信し、約6カ月の間に1,000名以上の日本人がムスリムとなった。そこで、二木はイスラム教団を創設する。教団は日本最大のムスリム組織となったのである¹¹⁾。しかし「豚肉も食べられるし、酒を飲んでもいい、というから入った¹²⁾」人が大部分であり、教団は「信者をどんどん増やすが、質より量ということで、名前ばっ

資料紹介

かりで戒律を守らない、というので、従来のイスラム教徒とは別れたような状態¹³⁾である。二木は「『海外医療団というのを作って、何回かアラブにいて、無料で診療なんかやった。アラブ側としては、イスラム教徒は増やすし、ときどき来て、無料診療をやる、というので喜ぶ』……ちょうど石油ショックの後でアラブ側の日本に於ける地位がグリーンと重味を増してきた時期、まさに、そこらへんの政治家が真似のできぬタイミングの良さ。いつのまにか、国内でよりアラブの世界で有名になってしまったのである¹⁴⁾」。

新宿・歌舞伎町の富士ビルにある「パン・アラブ・エージェンシー」なる通信社は同ビルにある日本イスラム教団の附属機関であり、日本イスラム教団と同じビルにある3つの施設「日本イスラム教団新宿診療所」「ロイヤルクリニック新宿」「信販薬局」とは表裏一体の関係にある¹⁵⁾。この「クリニックは、診療の患者数、回数を過少申告する一方、実在しない広告会社の領収書を偽造して架空の広告費を計上したり、まったく関係ない会社に手数料を支払ったようにみせかけるなど架空経費を計上、所得の半分以上を隠し、51年～53年の3年間で2億1千万円を脱税。さらに隠し所得の約半分が重加算税対象とされ、追徴税額は1億4千万円にふくらんだ。脱税した金の行方について、関係者の多くは、同クリニックの実質的な「経営者」である二木秀雄氏に流れ、同氏の主宰する『日本イスラム教団』（新宿区歌舞伎町1の5）の活動費に使われたものとみている。同氏は、教団のほか、パン・アラブ通信社も経営し、同通信社が昨年（1979年：筆者注）不正請求問題にからんで『日本ではキリスト教徒である大平総理が就任して以来、イスラム教徒に対する圧迫が増大し、東京都の保険関係者がイスラム教徒の医者や保険チームに圧力を加えている』と中東諸国に配信した。このため、インドネシアやパキスタンから「弾圧」の調査に政府高官が来日、外相、厚相に真偽をただす騒ぎになった。この「弾圧」報道について、日本イスラム教系15団体で作っている日本イスラム団体協議会は『事実無根』と発表¹⁶⁾した。「日本イスラム教団は、政治的、便宜的に作られた速成教団で、今ではほとんど実体はない……病院の外来患者を勝手に信者に仕立てて登録し、病院の脱税と731部隊の経歴が暴かれて結局は有名無実な教団に崩壊してしまった¹⁷⁾」といえよう。

現在、イスラーム組織としての機能を果たしているのは日本ムスリム協会とイスラミックセンター・ジャパンの2組織であり、他の団体は名目だけと評してよいだろう。各団体に所属する会員はムスリム協会やイスラミッ

クセンターの会員と重複していると考えてよい。例えば、日本のムスリム組織を統轄する形態の名称である「イスラーム団体協議会」も実体はなく、ムスリム組織を統轄する点ではイスラミックセンターが実体を備えている。

Ⅳ おわりに

宗教年鑑によれば日本人ムスリムは5万をこえている。この数は1975、76年頃の日本イスラム教団の布教活動によるものであろう。しかし、ムスリムは実際には多くても全国で3,000名程度と推定され、しかも断食等多少でも行う人に限れば数百名程度と考えられる。

一方、2万～3万ほどいると思われる日本滞在外国人ムスリムのほとんどは1～2年の短期滞在者で、合同礼拝や行事への参加状況から判断してパキスタン・インドネシア・マレーシアの人達が多い。

日本人ムスリムのほとんどは大学卒の高学歴者で、知識層に属する。日本のムスリム組織は知識人のサークルに近いと考えられ、そのことが、かえって日本でイスラームの拡大しない原因ともなっている。日本イスラーム界には、学問研究において秀れた人はいても宗教活動の指導者はほとんどいないといつてよからう。

イスラーム活動はモスクのあるところで活発である。日本における活動の中心は東京（1983年までモスクがあり、その後はマーハドで合同礼拝を行っている）、関西（神戸にモスク）、それに徳島と思われる。

イスラームを普及するためには日本の文化との調和を考え、日本人の感性を考慮しなければならない。イスラーム諸国の慣行をそのまま持ち込もうとしても定着するはずはない。技業末節の宗教儀礼が日本人にとって受け入れ難いものであれば無理に強制するべきではなく、イスラームの基本原理をこそ大切にすべきである。現在行われている礼拝の形にしてもハディースによるものであって、形についてクルアーンでは言及していない。慈悲・慈愛というクルアーンの最初に示される精神、平等の思想が重要なのである。1971年ファイサル国王（サウジアラビア）が東京モスクで、一般の人と同じ向き・同じ段で礼拝したことからも、イスラームのもつ「平等」思想に注目しなければなるまい。

なお、どの宗教にもいえることであるが、国益あるいは個人的利益のために宗教を利用する行為は慎むべきである。日本におけるイスラームの歴史が「利用される存在」を示しているが故に、特に強調しておきたい。

本稿をまとめるにあたり、日本ムスリム協会、イスラ

ミックセンター・ジャパン、マーハド、イスラーム文化研究所、イスラミック・ダイレクトレイトに関係するムスリムの方々にたいへんお世話になった。深甚の謝意を表します。

注 記

- I-1) A・B・エル・セバイ『イスラームと日本人—激動する世界の中で—』潮文社1981 pp. 139~143
- I-2) 丸山直起「中東と日本」(板垣雄三編『中東ハンドブック』) 講談社1985 p. 197
- I-3) 嶋田襄平編『イスラムの世界』日本放送出版協会1983 pp. 180~181
- I-4) ソーファー(徳久球雄・久保田圭伍・生野善應共訳)『宗教地理学』大明堂1971 p. 143
- I-5) 齊藤積平「書評『日本イスラーム史』に寄せて」『アッサラームNo.39』イスラミックセンター・ジャパン1988 pp. 51~52
- I-6) 小滝透『密教とイスラーム 高野山修行記』東方出版1986 p. 156
- I-7) 大島直政『イスラムからの発想』講談社1981 p. 6
- I-8) 石川良孝『オイル外交日記』朝日新聞社1983 p. 114
- I-9) 黒田寿郎『イスラームの心』中央公論社1980 p. 10
- II-1) 小村不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟1988 p. 41
- II-2) 前掲II-1) pp. 146~151
- II-3) 前掲II-1) pp. 154~155
- II-4) ABU BAKR MORIMOTO(森本武夫)『ISLAM IN JAPAN ITS PAST, PRESENT AND FUTURE』ISLAMIC CENTER JAPAN 1980 p. 9
- II-5) 前掲II-1) pp. 353~359
- II-6) 前掲II-4) p. 9
- II-7) 前掲II-1) p. 43
- II-8) 前掲II-1) p. 519
- II-9) 前掲II-1) p. 67
- II-10) 嶋田襄平・板垣雄三・佐藤次高監修『イスラム事典』平凡社1982 p. 289
- II-11) 前掲II-1) p. 397
- II-12) 前掲II-1) pp. 418~419
- II-13) 前掲II-1) p. 403
- II-14) 前掲II-1) pp. 409~411
- II-15) 前掲II-1) pp. 426~428

- II-16) 前掲II-1) p. 522
- II-17) 前掲II-1) p. 447
- II-18) 前掲II-1) pp. 448~449
- II-19) 前掲II-1) p. 110
- II-20) 前掲II-1) pp. 202~205
- II-21) 前掲II-1) pp. 371~381
- III-1) 前掲II-4) p. 39
- III-2) 前掲II-4) p. 40
- III-3) 『JAPAN MUSLIM ASSOCIATION—ITS BRIEF INTRODUCTION AND ACTIVITIES』JAEAN MUSLIM ASSOCIATON 1980. 7. 1 p. 2
- III-4) 前掲II-4) p. 45
- III-5) 『日本ムスリム協会会報No.19』1973. 2
- III-6) 文化庁編『宗教年鑑昭和61年版』ぎょうせい pp. 134~135
- III-7) 『ISLAMIC CENTER, JAPAN INTRODUCTION』ISLAMIC CENTER, JAPAN
- III-8) 前掲III-6) pp. 134~135
- III-9) 前掲III-6) pp. 134~135
- III-10) 『週刊文春』1979. 3. 22 p. 26
- III-11) 前掲II-4) pp. 50~51
- III-12) 前掲III-10) p. 26
- III-13) 前掲III-10) p. 27
- III-14) 前掲III-10) pp. 26~27
- III-15) 前掲III-10) pp. 24~25
- III-16) 毎日新聞(夕刊) 1980. 7. 25
- III-17) ひろたみを「日本の新新宗教イスラム教」『話のチャンネル 4月1日号』日本文芸社1988 p. 77

＜編集委員会より＞

地理学の側面から日本のイスラムについて書かれた論文は少ない。編集委員会は岩井純君が研究中のイスラムについて、表記の題で依頼し執筆を願った。筆者から諸般の事情により、一部引用の形をとったところがあるとの報告があったことをおことわりしておきたい。